フランス第二帝政期における経済発展（1）
：サン・シモン主義

田　中　文　憲*

Economic Development during the Second Empire of France（1）
：Saint-Simonism

Fuminori TANAKA

要　旨

フランスは第二帝政期において、経済が急速に発展し、それまで数十年の差をつけられていたイギリスとの差を一気に挽回し肩を並べるまでになった。

本稿では、なぜ第二帝政期にフランスが急速な発展を遂げたのか分析を試みた。

分析の結果、「生産主義」を掲げたシュバリエやペレール兄弟などの非カトリック的かつ非社会主義的なサン・シモン主義者たちが、貧困をなくすためには社会全体の生産力を増大する必要があると考える「特異な」皇帝ナポレオンⅢ世と奇跡的に出会い、協力し合った結果であることがわかった。

サン・シモン主義者たちは、彼らの理想とする「普遍的協働体」を実現するために行動し、革新的な銀行であるクレディ･モビリエを生み出し、人とモノを結びつける鉄道網を完成させたが、これらが人々に刺激を与え経済の大発展に繋がったのである。

キーワード：サン・シモン主義者、ナポレオンⅢ世、普遍的協働体、クレディ・モビリエ、鉄道

Ⅰ　はじめに

フランス第二帝政期はナポレオン・ボナパルトの甥ルイ・ナポレオンがクーデタによりナポレオンⅢ世となった1852年12月2日から対プロイセン戦争で敵の捕虜となり、議会によって帝政の廃止が宣言される1870年9月4日までの期間である。

18世紀末から19世紀初期は、大革命による混乱とナポレオン・ボナパルトの大陸封鎖令で商業が大打撃を受けたこともあり、経済は停滞していた。こうしたフランスの状況は1760年代に産業革命を開始し､1830年頃には完了させていたイギリスとは数十年の遅れがあった。ところが、第二帝政期に入るとフランスの混乱と無秩序に終止符が打たれ、急速な経済発展とともにイギリスとの約半世紀の遅れを一気に挽回したのである。フランスの産業革命は1830年頃から徐々に

2022年9月7日受理　*奈良大学名誉教授

進みつつあったが、第二帝政期はその完成期となった。

そこで、本稿では、なぜ第二帝政期に経済発展があったのか、その要因について分析を試みた[1)]。

II サン・シモン主義

フランス第二帝政期の政治・経済に重要な役割を果した思想にサン・シモン主義があり、第二帝政期の政治・経済を実際に動かしたのがサン・シモン主義者たちである。

1. サン・シモンの思想

後に、サン・シモン主義者のみならずマルクスやエンゲルスにも大きな影響を与えたサン・シモン～正式名クロード―アンリ・ド・ルブロワ・サン・シモン（Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon）は1760年10月17日パリに生まれた。父親はサン・シモン伯爵バルタザール・アンリで、ピカルディ・ペロンヌ地方のファルビを領有していた。サン・シモンはフランス社会が旧体制から新体制に移行する大転換期に生きた。彼はまず、アメリカ独立戦争への従軍（1779年）を皮切りに、フランス大革命（1789年）、恐怖政治（1793年）、テルミドール九日の反動（1794年）、総裁政府（1799年）、ナポレオン帝政（1804年）、第1次王政復古（1814年）、百日天下（1815年）、第2次王政復古（1815年）と目まぐるしく変化した激動の時代を経験した。この時代に新しく登場した急進勢力のやり方が行き過ぎるとつねに反動勢力を呼び起こして揺り戻しが起き、反動勢力の支配はふたたび急進勢力の反撃を引き起こした。

この過酷な体験から、サン・シモンはフランス革命を批判する。なぜなら、フランス革命は旧勢力を打倒し、それに代わる産業的、科学的体制を組織すべきところ、法律家（légistes）が革命の先頭に立ち、形而上学者（métaphysiciens）の学説をもって革命を指導した。このため革命は脱線し、サン・シモンの考えるあるべき社会の形である産業者と科学者を中心とする社会は形成されなかったからである。サン・シモンは産業者が国を動かすべきであると主張する。たとえば産業者に国の予算作成権を委ねる必要があると説く。しかし、サン・シモンは、産業者が権力を奪取するのに暴力を使うことは否定する。彼が目指すのは説得による漸進的な改革であり、王政も維持して差し支えないと考える。彼の理想とする国の形は、王と産業者が協力し合う「産業的君主制」（la monarchie industrielle）であり、そこでは国家は一大産業的アトリエ（un vaste atelier industriel）となり、一種の「協働社会」（アソシアシオン）（association）が形成される。その「協働社会」のスローガンは、「すべては産業によって、すべては産業のために」（Tout par l'industrie, tout pour elle）という「産業主義」（industrialisme）を謳うものである。

サン・シモンは生まれによる特権や差別は廃止するべきだと主張したが、人に能力の差があること、そしてその結果各人に収入や資力の差が出るのはやむをえないと考えた。彼はこうした不平等こそ真の平等だと考え、これを「産業的平等」（égalité industrielle）と呼んだ。こうしたことから彼は、「協働社会」では、位階制が敷かれ、エリートによる計画と能力による分業が行われるべきだと考えたのである。ここには、「平等」に関するサン・シモンとマルクスの違いがよく現れている。この考えを後に弟子たちは「各人にはその能力に応じて、各人の能力にはその仕事

に応じて」（à chacun suivant sa capacité, à chaque capacité suivant ses oeuvres）と唱えるようになる。

晩年のサン・シモンは宗教色を強め、『新キリスト教』（1825 年）を著わした。この著作ではキリスト教の持つ「神による霊魂の救済」などには力点は置かれず、彼の関心はもっぱら世俗的なもの、道徳的なものに集中している。彼は「新しいキリスト教においては、一切の道徳が、すべての人間は互いに兄弟として振舞うべしというあの原理から直接的に導き出されるであろう」（Dans le Nouveau Christianisme, toute la morale sera déduite directment de ce principe: les hommes doivent se conduire en frères à l'égard les uns des autres）と述べ、「宗教は最も貧しい階級の境遇をできるだけ速やかに改善するという大目的をめざして社会を導いていかなければならない」と主張する。ここにも、宗教は民衆の階級意識を鈍らせる阿片であり、貧しい階級を救うにはプロレタリアートによる暴力的革命によるしかないと考えるマルクスとの違いが見てとれる。周知のとおり、マルクスとエンゲルスはサン・シモンを「偉大な空想家」と呼び、彼の考え方を「空想的社会主義」と呼んだが、サン・シモンが没して 200 年後の今日、はたしてどちらの考え方が空想的であったのか検証してみる価値がありそうである [2)]。

2. サン・シモン主義者

1825 年 5 月サン・シモンが亡くなった後、サン・シモンの最後の助手で銀行家のロドリーグ（Olinde Rodrigues）を中心に詩人のアレビ、医師のバイイ博士、弁護士のデュベルジェなどが「サン・シモン主義」運動を立ち上げた。彼らは機関紙『生産者』（le Producteur）を刊行したが、この雑誌の周囲に理工科学校（Ecole Polytechnique）の生徒アンファンタン（Barthélemy-Prosper Enfantin）やフランス・カルボナリ党創設者の一人バザール（Saint-Amand Bazard）、のちの大実業家ペレール（Isaac Péreire）、鉱山技師より転じて経済学者となったシュバリエ（Michel Chevalier）などが集った。彼らは 1828 年から翌 29 年にかけてパリのタランヌ街において一連の講演を行った。その記録『サン・シモンの学説解義』（Doctrine de Saint-Simon, Exposition, Premiére année、1828-1829）（日本語訳：サン・シモン宣言―「サン・シモンの学説・解義」第一年度、1828-1829、木鐸社）は、後にハイエクによって「社会主義の新約聖書ではないにしても、少なくとも社会主義の旧約聖書と呼ばれる価値はある」と評価されるなど、ヨーロッパの思想に大きな影響を与えた。

彼らは 1829 年 12 月末「サン・シモン教会」を創設した。その組織は位階制で教父、参事会、使徒職から成る。トップにはバザールとアンファンタンが就き、幹部の多くには理工科学校の生徒や卒業生が就いた。彼らは『生産者』に代わる機関紙『組織者』（L'Organizateur）を発刊し、日刊紙『地球』（Le Globe）を買収してこれも機関紙に加えたことからイギリス、ドイツ、ベルギー、スイス、オランダ、イタリアなどにもその教義を活発に宣伝した。

しかし、ほどなく表向きは女性解放問題が原因でバザールとアンファンタンは衝突し、バザールはほかの 19 人とともに 1831 年 11 月サン・シモン教会を離れた。この間発言力を強めたのがシュバリエである。彼は、議論と規制に産業的実践を対置させ、同時に政治を排除し、それに代わってテクノクラート的・金融的な権力を持ち出した。そしてエンジニアと銀行家による権力奪取を正当化し、政治的代表制の代わりに産業的実践を未来の政策として表明した。これを受けてアンファンタンとシュバリエは、交通ネットワークの統一的で世界的な建設には新宗教が鍵になると

の見解で一致し、以後アンファンタンは「象徴的な仕事」をシュバリエは「実践的な仕事」を担うことになる。1832年初頭、サン･シモン学派が「教義」から「実践」に力点を移動し始めると、サン・シモン学派参事会の実権はこの両者によって掌握されることになった。この動きについて行けず1832年2月ロドリーグが教会から脱退した。

シュバリエは「われわれはアンファンタンと共に真のサン･シモン主義者に留まろう」と言い、二段階からなる平和的な権力奪取戦略構想を発表した。まず、新教義を作り、メディアと学校を介してそれを普及させる。次に交通ネットワークの構築と資金調達によって産業協働体（アソシアシオン）を実現するというものであった。この時シュバリエは初めてネットワークの近代的な考え方を明確に採用したとされる。またシュバリエは社会を改善するためには「暴力」ではなく官僚主義的でリベラルな産業主義が必要なことを強調する。

実は、アンファンタンとバザールの衝突には、より本質的な問題が隠されていたのである。それはバザール、ビュッシュ、ルルーなどいわゆるサン・シモン左派が「共産主義」に接近したことにある。それが決定的になったのが、1830年の7月革命による慢性的騒乱の掉尾を飾るリヨンの職工の大反乱である。この産業技術より社会闘争の優先を主張する事案にバザール一派は同情的であったため、アンファンタンはこの一派に対して強硬姿勢で臨み、ピエール・ミュッソによれば、「サン・シモン主義運動から社会主義的側面すなわち社会的・政治的闘争路線を排除することができた」ということになる。

これにより、アンファンタンとシュバリエは、平和路線をとりつつ技術ネットワークの構築、交通（コミュニカシオン）（Communication）、普遍的協働体（Association Universelle）を目指すことになる。

しかし、アンファンタンたちの煽動的な言動や異様な風体が社会秩序と風紀を紊乱したとして検挙され、1年の禁固刑を受けた。さらに1832年8月裁判所がサン・シモン教会の解散を命じたことから、サン・シモン学派は壊滅的な打撃を受けた。

1833年3月獄中のアンファンタンとシュバリエは袂を分った。同年8月1日恩赦で出獄した二人は別々の道を歩む。アンファンタンは「スエズはわれわれのライフワークの中心」だと言ってスエズ地峡の貫通計画を実現するためエジプトに向った。アンファンタンはオスマン・トルコのエジプト総督であるパシャに会って説得するも失敗したため、スエズ運河計画は暗礁に乗り上げてしまった。結局スエズ運河は1854年最終的にフェルディナン・ド・レセップスによって開通している。帰国したアンファンタンは鉄道に全力を傾けた。一方のシュバリエは、交通ネットワークを研究するため、1833年10月から35年11月までアメリカに滞在した。帰国したシュバリエは、1838年『フランスにおける物質的利益―道路、運河、鉄道の公共事業』を出版し、サン･シモン教の聖なる三訓―公共事業、銀行およびその他の信用制度、職業教育―の必要性を説いている。シュバリエもまた鉄道に注力する。1835年7月にパリ―サン・ジェルマン線の許可をすでに取得していた友人のペレール兄弟と鉄道会社を設立し、その技術顧問に就いている。この路線はパリを結ぶネットワークの最初のものであり、サン・シモン主義者にとってきわめて象徴的であった。

1848年末サン・シモン左派グループが追放された後、ルイ・ナポレオンが台頭するとシュバ

リエやペレール兄弟のサン・シモン右派は、官僚主義的（テクノクラティック）リベラルを旗印にルイ・ナポレオンに接近した。1851 年のクーデタによる帝政の成立時にはナポレオンⅢ世支持をまっ先に表明し、シュバリエは国務院参事（Conseil d'Etat）つまり皇帝の顧問に任命された。鹿島茂は、シュバリエとペレール兄弟について「アンファンタンたちの神がかりの宗教理論についていけなくなった彼らはサン・シモン主義のなかから経済理論だけを取り出し、これを応用しようと機会を狙っていたので「隠れサン・シモン主義者」のルイ・ナポレオンが全権を掌握するとすぐに飛びついた。第二帝政の経済政策はじつにこの両者によって推し進められたといっていい」と述べている。ピエール・ミュッソは、アンファンタンとシュバリエというサン・シモン主義を象徴する人物が亡くなった後も「彼らの思想はこの国のエリート技術官僚たちに情熱を与え続けた」と述べている[3)]。

3. ナポレオンⅢ世

従来のナポレオンⅢ世の評価は「ナポレオンの輝かしい栄光をなぞろうとした凡庸な甥が陰謀とクー・デタで権力を握り、暴力と金で政治・経済を 20 年間にわたって支配したが、最後に体制の立て直しを図ろうとして失敗し、おまけに愚かにもビスマルクの策にはまって普仏戦争に突入して、セダンでプロイセン軍の捕虜となって失脚した。つまり、ナポレオンⅢ世は偉大なナポレオンの出来の悪い茶番を演じた漫画的人物であり、しかも女性関係にだらしなく次々愛妾を囲ったことから、好色なただの馬鹿」というものであった。こうしたイメージは 1980 年代以降急速に見直されているが、ナポレオンⅢ世にこうしたイメージを植つけさせた人物が二人いる。その一人がマルクスである。その代表的なものがマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の冒頭にある「ヘーゲルはどこかでのべている、すべての世界史的な大事件や大人物はいわば二度あらわれるものだ、と。一度目は悲劇として、二度目は茶番として、と、かれはつけくわえるのをわすれたのだ。ダントンのかわりにコーシディエール、ロベスピエールのかわりにルイ・ブラン、1793 年から 1795 年までの山岳党のかわりに 1848 年から 1851 年までの山岳党、叔父のかわりに甥」（Hegel bemerkt irgendwo,daß alle großen weltgeschichtlichen Tatsachen und Personen sich sozusagen zweimal ereignen. Er hat vergessen hinzuzufügen：das eine Mal als Tragödie, das andere Mal als Farce, Caussidière für Danton, Louis Blanc für Robespierre, die Montagne von 1848-1851 für die Montagne von 1793-1795 , der Neffe für den Onkel）である。もう一人の人物が、共和国のシンボルであり、フランスの国民的詩人にして『レ・ミゼラブル』を書いた大文豪、ビクトル・ユーゴーである。彼は 1851 年 12 月のクー・デタによるナポレオンⅢ世の帝政で亡命を余儀なくされ英仏海峡のジャージー島やガンジー島に居をかまえ、『ある犯罪の物語』（Histoire d'un Crime）,『小ナポレオン』（Napoléon le Petit）、『懲罰詩集』（Les Châtiments）などを矢継ぎ早に発表し、ナポレオンⅢ世を徹底的に攻撃し、虚仮にしたのである。この二人の大物の影響力は凄まじく、とくにマルクス主義が退潮期に入る 1980 年代までナポレオンⅢ世の酷いイメージは続いたのである。

しかし、近年ではその評価は大きく変化して来ている。たとえば「ナポレオンⅢ世が人為的に誕生させた加速型資本主義が、その後の産業社会、とりわけ消費資本主義の骨組みを決定づけた」や「第二帝政は長らく続いたフランスの混乱と無秩序に終止符を打ち、国内的にも国外的にも経

済的大発展をもたらし、第三共和政の繁栄を準備した」などである。

ナポレオンⅢ世は、シャルル―ルイ―ナポレオン・ボナパルト（Charles-Louis Napoléon Bonaparte）としてナポレオンの弟オランダ王ルイ・ボナパルトを父親に1808年4月に生れている。若いルイ・ナポレオンはスイスのアレネンベルクで育ち、アウグスブルクのギムナジウムで教育を受け、その後ローマやロンドンに滞在するが、すでにこの頃には将来フランスの支配者になることを確信していたと言われている。後にサント・ブーブ（Sainte Beuve）によって「馬上のサン・シモン」や鹿島茂によって「隠れサン・シモン主義者」と呼ばれるようになるが、サン・シモンおよびサン・シモン主義を最初に知ったのは1833年頃だと推測されている。とくにイギリス滞在中に観察した産業革命の有様から社会問題にも強い関心を持ち、死んだ兄の養育係だったナルシス・ビエヤールを先生にしてサン・シモン主義の勉強をしている。

1838年10月ルイ・ナポレオンはロンドンに居をかまえ、母から相続した莫大な遺産で生活した。この時イギリスの工業地帯を見て回り技術者や科学者にも会って実際的知識を身につけ1839年に『ナポレオン的観念』（Des idées napoléoniennes）を出版している。この著作の中で、ルイ・ナポレオンは「伯父の大ナポレオンがフランス革命の打ち立てた民衆主権と自由の理念と同時に大革命に含まれた破壊的、否定的な側面を取除いた唯一の「大革命の遺言執行人」であったことを示し、未来において繁栄と平和を実現するには民衆の意思を直接に反映する制度とその意思を秩序と権威を持って実行に移す指導者つまり皇帝の存在が歴史的に見て必然的かつ必要不可欠であること」を説明している。また、この著作から彼が公共事業や都市計画を「流通の促進による物流の循環」「循環による社会的富の増大」というサン・シモン主義的観念から考えていたことが見てとれる。

ところが、ルイ・ナポレオンは1840年8月権力奪取を狙ってブローニュで蜂起したものの失敗し、「アム要塞」に収監された。拘束の身でありながら読書と執筆は自由にできたため、1844年に獄中での最大の成果である『貧困の根絶』（De l'extinction du paupérisme）を書き上げている。彼はアダム・スミス、ジャン・バチスト・セーなどの自由主義経済学者、ルイ・ブラン、プルードンなどの社会主義者、アンファンタン、ミシェル・シュバリエなどのサン・シモン主義者の著作を広く読み、社会を根本的に改造する方法について考察している。結論は、社会の根本的改造には、社会全体の生産力を増やさなければならないというサン・シモン的発想と同じになっている。さらに、「貧困の根絶」を実現するためには皇帝が国民の「頭」となり民主主義が「胴体」となるべきだと主張する。なぜなら、民主主義だけでは衆愚政治に陥り、皇帝だけでは独裁政治になるからである。つまり、民主主義に支えられた「皇帝」だけが唯一労働者階級の解放をなしとげ、貧困を根絶することができると説くのである。

1846年5月25日ルイ・ナポレオンは「アム要塞」からの脱獄に成功した。この時パンゲという石工に扮して脱出したため、「バダンゲ」というあだ名をつけられてしまい、その後ナポレオンⅢ世を揶揄するときにしばしば使われることになった。

1848年2月にはいわゆる「二月革命」が起き社会・政治は大きく揺れた。しかし、「6月事件」で労働者による暴動をカベニアック将軍が鎮圧し、1,500人を殺害、15,000人を政治犯としてアルジェリアに追放して以降、共和派はもはや民衆の代弁者たりえず、革命があったにもかかわら

ずというより数度にわたる革命のせいで、その度に経済の成長が停滞し、民衆の生活レベルは下落した。こうしたことを背景に、ルイ・ナポレオンは1848年12月22日に行われた選挙において、民衆の安定を求める声を味方につけて大統領になった。そして1851年12月2日にクー・デタを決行し、12月20～21日に行われた国民投票で国民の大多数がクー・デタに賛成し、さらに1852年11月国民の圧倒的多数が帝国の再建に賛成したことから12月2日フランス帝国が成立し、ルイ・ナポレオンはナポレオンⅢ世となり、第二帝政が開始された。ナポレオンⅢ世が権力を掌握すると、すぐさま鹿島茂のいう「修正サン・シモン主義者」のミシェル・シュバリエやペレール兄弟が膝下にかけつけた。彼らのいうサン・シモン主義は、典型的な産業優先主義なので、共和制であろうと王制であろうと帝政であろうと産業さえ保護し、自由な経済活動ができればその体制を問わないという点に特徴がある。この点において、政治を安定させてそれを経済的発展の原動力にしたいと考えるナポレオンⅢ世との利害は完全に一致した。ミシェル・シュバリエらにとって、師サン・シモンが「貴族、軍人、法律家、不労所得者たちは、産業者と結びついた国王に抵抗しようとは決して企てないであろう。なぜなら、産業者と結びついた国王は、社会の他のすべての階級が集結した力より百倍もおそらくは千倍も大きな力だから」（Les nobles, les militaires, les légistes et les rentiers n'entreprendront point de lutter contre le Roi uni aux industriels; car le Roi uni aux industriels est une force cent fois et peut-être mille fois plus considérable que celle de toutes les autres classes de la société réunies）と述べた。まさにその「産業者と結びついた国王」が登場したことを感じたのである。こうして「皇帝サン・シモン主義」とでもいうべき体制の下で、彼らは銀行の設立や鉄道の建設などに存分に活躍することができたのである。

ナポレオンⅢ世で忘れてならないもう一つの重要なことが、1860年1月23日の英仏協商協定の締結である。ナポレオンⅢ世は、商工業の振興には関税障壁の撤廃が不可欠というサン・シモン主義者たちの主張をいれ、激しい反発を覚悟の上で、協定の締結に踏切った。反発する者には、積極的に設備投資をするなら大規模な貸し付けを実施すると説得して押し切った。この結果フランス経済は一時的に景気後退したが、やがて効果が出始め、このショック療法で覚醒した商工業者がイギリスとの競争に備えて積極的に設備投資したことからフランスはやっとイギリスの産業革命の段階に追いつくことができた。さらに、1860年から70年までの10年の間にフランスの対外貿易額は倍増して、フランスは第二次産業革命を経て、イギリスと肩を並べる経済大国に成長したのである[4)]。

Ⅲ　重要な経済政策の内容とその成果

1.　クレディ・モビリエ

サン・シモンは『産業者の教理問答』の中で、「産業者階級は…産業の全部門を互いに結びつける銀行によってつまり、あらゆる種類の産業者を互いに結びつける銀行家たちによって完全に組織されている」と述べており、公共財産の管理を委託されるのは産業企業の支配人（gérants des entreprises industrielles）、中でも銀行家であることを強調している。なぜなら「銀行家は産業者の総代理人とみなされうるし、またみなされなければならない」からである。サン・シモンの

弟子たちは、師が生産の組織と管理と配分の中枢機関として銀行を考えていたと受け取り、銀行を頂点とする中央集権的な経済組織を構想し始めたのである。具体的には、彼らは産業社会の主体的基礎を銀行と銀行家にもとめ、さらにこれを中心として未来社会の骨格ともいうべき「一般銀行制度」(le système général des banques) を構想する。「「一般銀行制度」においては銀行は国家の職能の直接執行機関として位置づけられ、単に信用機構の統轄者としてのみではなく、労働手段の社会的分配者として生産および流通過程における無政府的競争の除去、すなわち生産の組織化を実現するものとされた。この制度は、まず、物質界において政府を代表する中央銀行 (une banque centrale) を含む。この銀行はすべての富、すべての生産元本、すべての労働手段、要するに、今日個人的財産の総体を構成しているものの保管者となる。この中央銀行の下に地方銀行そしてその地域での専門銀行と体系化された中央集権的銀行制度が構想され、すべての需要は上級銀行 (banques supérieures) に集中し、すべての努力はそれより放散する。すなわち、彼らは銀行を生産と分配の総指揮者である国家そのものと考えたのである」。

ところが、19 世紀初め頃のフランスの金融制度は、あらゆる面で遅れていた。その原因は大革命の混乱とナポレオンの大陸封鎖によって商工業が大打撃を受け、産業革命も遅れたため金融の需要がなく、需要がないから供給の必要も生じなかったことにある。また、大革命時に大量発行された「アッシニア」(Assignat) (国有地を担保にした国債で、後に不換紙幣になった) の暴落により財産を失ったブルジョワはペーパーマネーをまったく信用しなくなったことも一因である。しかし、当時のフランスにも伝統的な大銀行は存在した。それはロスチャイルド家をはじめとするユダヤ系銀行を中心とする「オート・バンク」(Haute Banque) である。彼らは一般民衆から預金を受け入れることも小口資金を貸し付けることも産業へ投資することもなかった。彼らは貴族や大ブルジョワジーからカネを預ってはそれで国債や外国債を購入して利鞘を稼いでいた。一方、銀行から相手にされない一般庶民や小規模事業主などは高利貸しかそれと似た小規模の金融業者から手形と引換えに高利の金を借りたり手形を割り引いたりしてもらった。要するに、短期の小規模金融しかなかったのである。その要因としては手形貸し付けの期間が回収不能になるリスクが高くなるのを嫌って短くされたこと、また金融機関も長期貸し付けを担保する定期預金のような長期の資金調達手段がなかったことなどがある。

しかし、1820 年代になると社会の安定とともに大規模な事業に乗り出そうとする者が増加した。その結果、長期金融の必要性がでてきた。そこで登場したのがジャック・ラフィット (Jacques Laffitte) である。ラフィットは産業振興のための長期信用貸しという概念を初めて金融に持ち込んだ銀行家として近年評価されるようになった。彼は 1825 年「産業出資会社」(Société Commanditaire de l'Industrie) の設立を申請した。この銀行は資本金 1 億フランで巨大な持株会社的機能を果すべく構想された。すなわち、会社やその理事たちへの社会的信用を梃子にして社会に広汎に散在する退蔵貨幣の吸収と有価証券投資によるそれら資金の産業への積極的投入が意図されていた。しかし、政府は銀行業務全般にわたって拒否権を有する監査役を 2 名つける要求をしたため、出資に応じる者が現れず完全に挫折した。ラフィットは諦めず 1837 年普通銀行業務を加味して装いを新たに「商工一般銀行」(Banque Générale du Commerce et l'Industrie) として再申請した。これに対してフランス銀行から猛反対が出て "Banque" の名称を変更し「商工一般金庫」(Caisse

Générale du Commerce et l'Industrie）とすることで設立にこぎつけた。この「金庫」は「株式合資会社」（Société en commandite par actions）として登場したことが重要である。

このラフィットの「産業合資会社」と「株式合資会社」に触発されたのが、アンファンタンである。アンファンタンは、機関誌『生産者』（Le Producteur）で「合資会社は働かない資本家と働く産業家の結合として定義できる」「そしてその資本参加の証明が株式（action）によってなされ、それが譲渡可能である時それは「株式合資会社」（会社債務につき自ら責任を負う無限責任社員がいる）となる」。この形式の会社は小資本家を個々人の力ではとうてい実現不可能な大規模な事業に参画させるという利点を持つ。アンファンタンは、「株式合資会社」という制度こそが社会的な生産を拡大し、それと同時に個人の間の不平等を解消する最高の手段と考えた。これが銀行として設立されれば、それはサン・シモン主義者の夢見る「普遍的協働体」（Association Universelle）の心臓となり、社会という体の隅々までマネーという血液を循環させることができるのである。鹿島茂は「アンファンタンが『生産者』で展開した銀行論はきわめて先駆的、予言的な面をもっていた」と評価している。しかし、アンファンタンの構想は時代を先取りしすぎたため実現にいたらなかった。なぜなら、一時ラフィットの「商工一般金庫」に代表される「金庫式銀行」が続出したが、1848 年恐慌によってそれらが全滅するという逆風下にあったからである。

しかし、このサン・シモン主義の銀行論はナポレオンⅢ世の全権掌握と同時に息を吹き返し、実現可能性を帯びることになった。それを実現させたのがエミール（Emile）とイザーク（Isaac）のペレール兄弟（frères Péreire）である、この兄弟は、ポルトガル系ユダヤ人（Sephardi）としてボルドーに生れた。二人は両替商だった伯父のイザーク・ロドリーグを介してサン・シモン主義に出会ったようである。二人は、銀行と株式会社がマネーの流通を促し、鉄道が人とモノの流通を促進するというサン・シモン主義の理論を現実に適用しようと試みた。具体的にはジャム・ド・ロートシルトやエシェンタルらのユダヤ系銀行家に取り入り、彼らをスポンサーにしてフランス初の鉄道であるパリ―サン・ジェルマン鉄道の事業に打ち込み、1837 年これを開通させた。この成功によってそれまで夢想家の絵空事だと考えられていたフランスでの鉄道事業に人気が集中し、鉄道投機ブームが起きた。エミール・ペレールはロスチャイルド銀行が所有する北部鉄道の社長になり、イザーク・ペレールはラフィット銀行が支援するパリーリヨン銀行の支配人になった。しかし、1847 年のミニ恐慌、1848 年の 2 月革命の混乱によって鉄道建設は完全に止ってしまった。1851 年 12 月 2 日にルイ・ナポレオンがクー・デタを起こしたとき、フランスの鉄道建設は中断されたままであった。その原因は、まず経済恐慌を恐れたロスチャイルドなどの大銀行が鉄道事業はリスクが高いと判断して撤収を図っていたからであり、もう一つは、ロスチャイルド銀行が前王朝のオルレアン家の金庫番であり、オルレアン家の復活を狙っていたため、新しい支配者であるルイ・ナポレオンに対して資金を出さなかったことにある。こうした状況下、ルイ・ナポレオンは自分の思いどおりに動いてくれる新しい銀行の必要に迫られた。そして、このルイ・ナポレオンの思いに答えたのが、ペレール兄弟である。1852 年 9 月 9 日ペレール兄弟は「バンク・デ・トラボー・ピュブリック」（Banque des Travaux Publiques）の設立申請をした。しかし申請を受けた大蔵省は「バンク」が使用されることに難色を示した。これは「バンク」には銀行券の発行ができるからで、発券銀行たる「フランス銀行」を牛耳るロスチャイルド家の意向が働いたと

見られている。こうして、「バンク」を外して「クレディ」（Crédit）を付けた「ソシエラ・ジェネラル・ド・クレディ・モビリエ」（Société Générale de Crédit Mobilier）（通称クレディ・モビリエ）（動産銀行）が1852年11月に設立された。資本金6,000万フラン、額面500フランの株式12万株を発行し、第一期の2,000万フラン（4万株）は、創立者たちの出資、残りは銀行の発展にしたがって公募することにした。株式の額面が小さいのは、小金を貯めたプチ・ブルジョワが買いやすいようにとの配慮である。設立の目的は、手形割引のほか商工業および公共事業の発展を株式の購入や長短期資金の貸し付けによって助けることとなっている。要するになんでもできる金融機関で、鹿島茂の言い方を借りると巨大な「ベンチャー・キャピタル」ということになる。なお、資金調達は長短期の社債の発行で行うことになった。これは、一般民衆により近づきやすい公債システムを開くことを意味した。民間に眠る潜在的な資金を吸収するこの画期的な方法に対して大蔵省は「資本金500万フランに対して、社債の発行は2,500万フランを超えてはならない」とする制限を付けた。これにはロートシルト家の差し金があったとされている。そもそもクレディ・モビリエの設立に関して、ロスチャイルド銀行の当主ジャム・ド・ロートシルトはナポレオンⅢ世に書簡を送り、「クレディ・モビリエの創設によって引き起される危険、とりわけ社債がほとんど無制限に発行される点、投資先が恣意に流される危険性を指摘、この巨大なベンチャー・キャピタルの出現がバブルを発生させると結論づけ、クレディ・モビリエの創立に対して皇帝に強く再考を促していた」のである。ジャム・ド・ロートシルトの本音は、クレディ・モビリエの発行する社債の利子がつくが一覧払いではない独自の証券、つまり銀行券の性格を持つと同時に国債、株式、社債のように短期または長期で償還されるすべての確定利子証券の性格を持っていることに注目し、この社債が将来あらゆる経済活動を行う企業を持ち株によって間接的に支配する「総合特殊会社」（オムニウム）（Omnium）を生み出す可能性があることを恐れたと見られている。つまり、フランスの全産業がクレディ・モビリエの傘下に組み入れられ巨大な独占資本が誕生することを意味する。そうなれば自分たちロスチャイルド銀行もあらゆる事業からはじき出されることになるからである。

しかし、いったん船出したクレディ・モビリエは積極的な投資および融資活動により急成長した。その結果、1856年には、額面500フランの株券に対して、配当金額は200フランにまで達した。実に40％の配当率である。クレディ・モビリエの活動は多岐にわたって展開された。たとえば、ミディ鉄道、東部鉄道とそれに関連する企業であるロワール炭鉱に資本参加したり、後に大西洋横断汽船会社へ発展するコンパニー・ジェネラル・マリティームを立ち上げた。さらに、パリ全域をカバーする6つのガス会社の統合を行い、パリ乗合馬車会社を設立した。また、首都パリの改造と美化に取組んだ最大の不動産会社コンパニー・イモビリエールを創設したほか、2つの重要な保険会社の設立や製塩会社の再編成を行うなど多岐にわたる。クレディ・モビリエは海外活動も活発に行った。たとえば、オーストリア、ロシア、スイス、スペインの鉄道会社への出資や立ち上げ、ダルムシュタット銀行やスペイン動産銀行などへの出資や立ち上げ、さらにエルベ川運河会社、その他炭鉱、公共事業など広範囲の事業に関与した。鹿島茂は、「クレディ・モビリエにはフランスを変える先進性があった。また、フランス社会はクレディ・モビリエが創設された1852年から十数年の間に前近代的社会から近代的社会へと一気に脱皮した」と結論づ

けている[5)]。

2.　鉄道

フランスの初期鉄道建設は、サン・シモン主義者たちによって担われたと言っても過言ではない。ミシェル・シュバリエは、日刊紙『グローブ』に寄稿した4本の論文をまとめて1832年『地中海体制』（Système de la Méditerranée）をパリで出版した。その中でシュバリエは、地中海を通して東洋と西洋は結びつくべきであり、さらに地中海周辺諸国を包含した「普遍的協働体」（Association Universelle）を実現するべきだと訴えた。そのための最重要の鍵となるのが鉄道であり、鉄道が国内の各地域を連結して国民を一つにし、さらに各国を連結する国際的な鉄道網は各国の関係を緊密化させる。シュバリエは、「鉄道は普遍的協働体の最も完璧な象徴である」と主張している。その後ほかのサン・シモン主義者たちも多かれ少なかれシュバリエの考えに影響され、実践に移った。

19世紀初頭のフランスの鉄道はイギリスと比較して大きく立遅れていた。当時フランスに存在していた鉄道といえば、1827年に開通した短区間の鉱業用鉄道サン・テティエンヌ―アンドレジュート、1832年に開通した旅客営業を行う最初の路線サン・テティエンヌ―リヨン間の58キロメートルのみであった。こうした状況下、1835年7月にパリ―サン・ジェルマン線の許可を得ていたペレール兄弟は友人のミシェル・シュバリエと手を結び1837年に当該路線を敷設した。これはパリ周辺における最初の鉄道として評価が高い。この鉄道の開通に刺激を受け、フランス全土で短距離の民営鉄道建設計画が持ち上った。鉄道ブームの到来である。

1842年に「フランス幹線鉄道建設法」（略称　鉄道法）（Loi relative à l'établissement des grandes lignes de chemin de fer en France）が制定された。これはパリを中心とした放射状路線7本と地方間路線2本を優先的に開通させようとするもので、同時に、幹線鉄道のためのインフラ（敷地の整備、切り通しなどの建設工事）は国家が、レール、駅、機関車、車両などの上物は企業がそれぞれ費用負担する官民一体方式が決められた。また、鉄道営業距離を短距離に制限すること、営業を期限付き（平均46年）の許可制とすることなどが決められた。この法律を受けて、パリから地方への幹線路線の敷設が一気に進み、すぐにパリ―ルーアン線とパリ―オルレアン線が開通した。ペレール兄弟は、以前ジャム・ド・ロートシルトのもとで金融業務に就いていた縁でロートシルトに働きかけ、フランス国内でもっとも富裕な地域である北部への鉄道敷設に乗り出していく。この鉄道は1845年に開業、翌年にはパリに到達している。ペレール兄弟が北部鉄道を重視したのは、シュバリエの「地中海体制」の観点から見ても北海沿岸の産業化地域を地中海地域と接続することはフランスの産業革命と経済発展にとって不可欠であると考えたからである。さらに、北部と地中海を結ぶ要となるローヌ渓谷では、サン・シモン主義者ポーラン・タラボ（Paulin Talabot）が鉄道事業に乗り出し、最終的にパリ―リヨン線、パリ―アビニヨン線、アビニヨン―マルセイユ線を個別に経営する3社を統合した。ちなみにアンファンタンはこの統合会社の理事に就いている。ところが万事順調に行くかに見えた鉄道建設は1847年の恐慌で一挙に頓挫してしまった。これはロートシルトなど「オート・バンク」が大きなリスクを恐れて鉄道事業から資金を引き上げたことが原因である。

こうした状況が一変するのがルイ・ナポレオンの登場によってである。ルイ・ナポレオンは大統領令を出し、七月王制下で制定された「鉄道法」を見直し、鉄道会社の開発利権を最高99年まで延長できるようにした。ナポレオンⅢ世の第二帝政期に入ると鉄道ブームが再燃した。この鉄道ブームを牽引したのはペレール兄弟とクレディ・モビリエであるが、強力なライバルとして現れたのがジャム・ド・ロートシルトとロスチャイルド銀行である。この両者はその後フランスのみならず外国においても激しく競争した。それはまさに「鉄道戦争」と呼ばれるに相応しいものであった。

その後さまざまな合従連衡を経て、フランスの鉄道は1857年までに政府の手によって6大会社に統合された。[北部鉄道（Chemin de Fer du Nord）パリから北フランス、イギリス海峡の諸港およびベルギー国境まで、東部鉄道（Chemin de Fer de l'Est ）パリから東フランス、ドイツ国境まで、西部鉄道（Chemin de Fer de l'Ouest）パリからノルマンディー、ブルターニュなどフランス北西部方面まで、パリ―オルレアン鉄道（Chemin de Fer de Paris à Orléans）パリからオルレアンを経由しフランス南西部方面まで、パリ・リヨン・地中海鉄道（Chemin de Fer de Paris à Lyon et à la Méditerranée）（略称PLM）パリからフランス南東部、地中海海岸方面まで、南部鉄道（Chemin de Fer du Midi）ガロンヌ川流域からスペイン国境まで]こうして1860年には全国鉄道網がほぼ完成した。

鉄道建設ブームは汚職や買収などの悪い面も残したが、競争による切磋琢磨がフランス社会に活気を与え、国土の隅々まで行き渡った鉄道網は人とモノの移動量を飛躍的に上げ、経済発展に大いに貢献した[6)]。

IV　経済発展の理由

1. 「普遍的協働体」という「大きな物語」

サン・シモン主義者たちがリオタールのいう「大きな物語」ともいうべき「普遍的協働体」という目標を掲げたことが、それを実現させるための具体的な実践に結びついた。「普遍的協働体」では、人、モノ、カネが自由に動き回わり、すべての人や地域、最終的には国もネットワークで結ばれる社会であり、各人は能力に応じて仕事を与えられ、仕事の成果に応じて報酬を受け取る、「平等」な社会が実現するはずである。当時、革命と反動政治の間で揺れ動く不安定なフランスで、国民の大多数は、マルクス主義者の唱える暴力革命による「共産主義体制」より、彼らが「空想的」と批判したサン・シモン主義者たちの考えに組したのである。

2. ナポレオンⅢ世という権威の利用

サン・シモン主義者たちは、産業を守ってくれるなら国王とでも皇帝とでも組む柔軟性を持ち合わせていた。サン・シモン主義者の中で中心となった理工科学校卒業生であるエリートたちが、ナポレオンⅢ世の権威を利用して、企画、立案、実践を行う、いわゆるトップダウン方式が実現したことが、大きな成果に繋がった。これによって、フランスは先進国（とくにイギリス）との遅れを一気に縮めることに成功した。この方式はその後、後進国が先進国に追いつくための

「キャッチアップ」型の経済成長方式の原型となった。その応用例は世界各地で見られるが、明治初期の日本はその代表例である。

3. サン・シモン主義者たちの非宗教性

サン・シモン主義者たちが第二帝政下の経済成長を担ったことはすでに述べたが、彼らが縦横無尽に活躍できた理由の1つに彼らの非宗教性が指摘できる。（ここで宗教というのはキリスト教、とくにカトリックである）伝統的なカトリックの価値観、倫理観によれば利益は人間を堕落させるものである。したがって生産や商業は軽蔑すべき行為だということになる。つまり、一代で築いた富は不浄なものでり、相続によって受け継いだ富は尊く、道徳的正当性を持つと考えるのである。サン・シモン主義者たち（とくに実践の場で活躍した人々）はこうした考え方に捕らわれない自由な発想と果敢な実践力を持っていた。これは、サン･シモン主義者の中にオランド･ロドリーグ、レオン・アレビ、ペレール兄弟、アシル・フールト（国務大臣）など多くのユダヤ人もしくはユダヤ系（改宗ユダヤ人）の人々がいたことと無縁ではない。そもそもナポレオンⅢ世が非カトリック的人物だったと言われおり、「生産主義」を掲げるサン・シモン主義者たちと波長が合ったことは間違いない。彼らは、ベンサム流の「最大多数の最大幸福」を目指す功利主義者であり、理論より実践と結果を出すことに情熱を燃やすプラグマティストであったと言えよう[7]。

V　おわりに

フランス第二帝政期における経済発展は、シュバリエやペレール兄弟に代表される宗教色、社会主義色を排除し、「産業主義」を掲げるサン・シモン主義者たちと、「貧困の根絶」を著わし、貧困を解決するためには社会全体の生産力を増大する必要があると考える「特異な」皇帝ナポレオンⅢ世が、たまたま奇跡的に出会い、結びついたことによって達成されたと言っても過言ではない。

第二帝政は1870年9月4日突然終焉を迎えるが、「理工科学校」を中心とするいわゆる「グランゼコール」（Grandes Ecoles）の卒業生から成るエリート官僚たちと政府が経済、政治を動かすという第二帝政期にその原型ができたこの「方式」は第五共和政下の現在に至るまでフランスの一つの特徴となっている。この結果、フランスは「ディリジスム」（dirigisme）つまり、国家主導主義もしくは国家介入主義の国と見られることが多い。これは国家が経済、政治の分野で指導力を発揮することが多かったためであろうが、旧ソビエト連邦のような強固な中央集権的計画経済体制とはまったく異なるものであり、優秀な官僚とその行動を支持する政治の世界がうまく結びついたからである[8]。

注

1）坂本慶一（1961）：フランス産業革命思想の形成、未来社、4、205-206
鹿島茂（2013）：渋沢栄一上算盤篇、文春文庫、223、226
中川洋一郎（2004）：暴力なき社会主義？、学文社、11
鹿島茂（2004）：怪帝ナポレオンⅢ世、講談社、137、179
2）坂本慶一（1961）：前掲、21、34、67、70、76、103、142、147、174
中村秀一（1990）：産業と倫理、平凡社、28、133、138、158
ピエール・ミュッソ（2019）：サン＝シモンとサン＝シモン主義、白水社、66、93-94
吉田静一（1975）：サン・シモン復興、未来社、29、32-33、34、48、72-73、75-76、80、251-252
サン＝シモン（2001）産業者の教理問答、岩波文庫、16、70、102、121
Saint-Simon, Claude-Henri de（1823）：Catéchisme des industiels, Hachette Livre（ Lightning Source UK Ltd）,. Milton Keynes. 2、7、9、36、55、65
サン＝シモン（2001）：新キリスト教（産業者の教理問答所収）、岩波文庫、247、250、297
Saint-Simon, Henri de（1825）：Nouveau Christianisme, l'Editeur ou du Centre Français d'Exploitation du Droit de Copie, Paris（ISBN:978-1533081599）、9
カール・マルクス（2011）：ユダヤ人問題によせて、ヘーゲル法哲学批判序説、岩波文庫、72
エンゲルス（2017）：空想より科学へ、岩波文庫、34-41
3）ピエール・ミュッソ（2019）：前掲、126-12、131-132、135-137、139-144、146-150、152-15、155
坂本慶一（1961）：前掲、181-185、226-228
中川洋一郎（2004）：前掲、34-35
鹿島茂（2004）：前掲、173-174、240-241
吉田静一（1975）：前掲、32-34
4）鹿島茂（2004）：前掲、10-11、13、16、25、36-38、46、49、52、136-137、157、246-248、357-360
鹿島茂（2013）：前掲、173-174、239-240
西永良成（2021）：ヴィクトル・ユゴー言葉と権力、平凡社、90-92, 112-113
マルクス（1994）：ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日、岩波文庫、17
Marx, Karl（2019）：Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte, Henricus Edition Deutsche Klassik UG, Berlin, 8
サン＝シモン（2001）：前掲、69
Saint-Simon, Claude-Henri de（1823）：op.cit., 64
5）鹿島茂（2013）：前掲、222、226-230、230-237、241-247
鹿島茂（2004）：前掲、199、201-202、203-204、220-223、224-227
中川洋一郎（2004）前掲、54、57-59、67
坂本慶一（1961）：前掲、139-140、223-225、250-253
サン＝シモン（2001）：前掲、127
瀬戸口ひとみ（1972）：フランス金融構造の史的展開、北海道武蔵女子短期大学紀要（5）、124-125、130
村岡ひとみ（1979）：第二帝政とクレディ・モビリエ、北海道武蔵女子短期大学紀要（11）、106、111-112、119、146
6）ピエール・ミュッソ（2019）：前掲、150
鹿島茂（2013）：前掲、240-242
鹿島茂（2004）：前掲、207-208、212-219
中川洋一郎（2004）：前掲、65-71、98-10、113-117、145、156

津村夏生（2020）：共和国から国民国家へ－サン・シモンおよびサンシモン主義研究－、国士舘大学審査学位論文、136-142
７）ピエール・ミュッソ（2019）：前掲、129、143-144
鹿島茂（2004）：前掲、407
中村秀一（1990）：前掲、199
田中文憲（2007）：フランスにおけるエリート主義、奈良大学紀要（35）、25
８）鹿島茂（2000）：前掲、46-49
橋本俊詔（2021）：フランス経済学史教養講座、明石書店、130-131
田中文憲（2007）：前掲、16-20

Abstract

Although France had been about half a century behind England economically prior to the enthronement of Napoleon III, they caught up rapidly during the Second Empire. This paper analyzes the reasons why France was able to develop its economy so rapidly during that period.

The analysis shows that the rapid development was brought about by the cooperation between the Saint-Simonians, non-Catholic and non-socialist, whose slogan was “industrialism” and Napoleon III, a unique and extraordinary emperor who believed the growth of production was a necessity in order to eradicate poverty.

Attempting to realize their goal of “Association Universelle”, the Saint-Simonians established “Credit Mobilier”, which contributed to the establishment of many new businesses as well as the nationwide railroad network, connecting people and goods. All of those things stimulated the French people to invest more actively, bringing about the great economic expansion.

Keywords: Saint-Simonians, Napoleon III, Association Universelle, Credit Mobilier, railroad